

第一部 石田三成公の末路



長浜市石田町治部の石田会館にある銅像

第二部 石田三成公の死に様



第三部 石田三成公の家臣団

令和四年一月 発行

水野隆生

第一部 石田三成公の末路

一 初めに

江戸時代中期元文三年（一七三八）に書かれた「美濃雑事記」を昭和七年に間宮宗好・伊東実臣氏が著した復刻版（一信出版社）を国立国会図書館デジタルコレクションの中から発見する。その中に、石田三成の末路の項目があり、興味を抱き、ここに概ね原文通り記述する。



杉山家に伝わる三成公の肖像画

津軽へ逃れた三成公の次男重成は杉山源吉となり、その末裔で杉山千代が所蔵の肖像。

二 石田三成の末路

石田治部少輔三成は【江州佐和山の城主】二十五万石】伊

吹山より谷草野と云ふ所へ行き、夫より小谷山を経て馬上

それ

山に走る。爰迄磯野平三郎（注1）、渡邊勘平（注2）、塩野清

二三

助供したり。石田三成三人に向て各々是迄の志誠に以て忘

れ難し、我思ふ子細あり、一先づ大坂へ打越し島津兵庫頭

義弘を頼み運を開かんと思ふなり、若し左有らん（もしその

ようになるならば）に於ひては此芳恩を報すべし、死したらば

草の陰迄も忘るまじ、先面々は何方へ成共落ち玉へと泪を

ます

流し申しければ、三人口を揃へて扱口惜しき仰にて候、死₁

さて

生を共にと存じ御供申せし某等を今御捨果候事如何なる

さてはて

いか

御心にて候ぞや、更に本意なく候と泣くなく申せば、三成

せんかた

詮方無く（どうしようもなく）泪を止め、千田采女（注3）は

うぬめ

死を遁れ在所へ来るやらん、彼が所に忍んでみんとあれば、

平三郎、采女は肥太りたる者にて馬を離れては歩む事なら

さため

ざる者にて、定て討れ候べし、某が兄塩津に出家仕て

つかまつり

あり。彼が方へ御忍びあらば別なふ頼れ申すべし、夫より

船を拵へ大津迄出で、夫より大坂へ入り玉へと云ふ。三成の云く、申す処宣しけれども、内府大津へ越さるゝ由聞えあればや、わが通るべからず、我存る旨あり、申すに任せて是より疾く落候へとあれども、流石余波の捨難き三人去るべき心地もなく涙に暮れて居たりしかば、三成大事の前に斯ては叶ふまじ、某が申すに隨はずんば是非無く自害すべしと云ふ。三人の者共力に及ばず、然る上は兎にも角にも御運開かせ玉はんこそ我等が願ふ処なれど、暇申して互に涙にむせながら別れくにぞなりにける。三成は独りすごすこと幼稚の昔物習したる三重院（伊香郡に入り、古橋村にある法華寺三珠院・母親の里）と云ふ僧、法華寺と云ふ所に在住あるを頼み見ばやと思ひ、夜に紛れ彼の方へ行き門を叩く。三重院弟子出て誰ぞと問ふ。三成斯くと云。内より云ふやうは、昨日田中兵部少輔吉政【三州岡崎十万石】井ノ口迄越され、山家を残る所なくさがし、剰へ三重院を縛り井ノ口へ出で行き候、斯様にては中々隠れ給はん事叶ふまじと云ひければ、三成力を落し、又近き所に善主院

とて相知れる僧の有りけるに立寄りければ、如何すべきと案する處に、在所の者來つて大事の落人を隠置き給はんこと以ての外の悪事なり、異見を用ひ給はずば、我々訴人申すべしと云ふに依て其處にも留まり得ず、山林に身を隠し食せざる事四日とかや。余りの事に稻の穂などを喰ふ故、脾胃（脾臓と胃）を損じ瀉病（下痢）して山中に伏しける所に、古恩恵せし古橋村與次郎太夫と云ふ者の許へやうくに行き頼み玉へば、與次郎太夫甲斐く敷頼まれ、山中の洞に隠し置き、毎日食事を運ぶ。爰に一両日あり。然る處に同村又左衛門と云ふ者與次郎太夫に言けるは、汝三成を隠す事沙汰あり、今天下の怨敵の科人こそよしなし、兎も角も分別候へと云。此由三成聞て與次郎に申しけるは、我は逆も（どんなにしても。とうてい）遁るべき身に非ず、此程の芳志謝するに詞なし、我茲にあらんと聞えば、汝が従類（一族と家来ども）刑罰に逢ふべし、我汝を殺さんこと死後迄恥辱なり、逆も生きるべき我ならねば、汝訴人に成り我を捕へて訴へ出でよとあれば、與次郎涙を流し、是は思ひも依らざる仰せかな、たとへ如何様罪科（罪）に行はるゝ共悔ひ侍らん、唯何國迄も御供申し成行き玉はんを見届け申すべしと誠に思入て云ひければ、三成志は初より満足なり、

去り乍ら頑れんは必定なれば、切ては汝を遁してこそ黄泉よみ

(死者の国)迄も心安けれ、疾くはやくはやくと有けれど、與次郎太夫力なく、泣くと田中兵部所へ斯くと告げる。兵部悦び急ぎ士卒を遣し、三成を生捕り、乗物に入れ井ノ口迄来る。田中政久は近江の國中を能く知れり、三成大方北の郡かなた（こほり・長浜か）に漂泊すべし迫とて、此方

彼方に番所かた（注4）を建て番の者を居え、山々峯々谷里林迄搜す故に、落人共若干引來れ共、三成にては非ざりけり。

【或説に浅井郡の内脇坂と云ふ所の葦原の中にて、田中兵部家来田中傳右衛門と云ふ者生捕るとも云】
田中兵部は三成を籠に召し家来田中善兵衛、国友與左衛

門、森毛甚九郎と云ふ者を附け置き能くと勞はりけり。膳部等（食膳など）結構にして進めけれども、三成曾て（全然）食せざる間、三人の者共免角と申しければ、去らば垂味噌を賜るべしとあれば、則謝し進めけり。後、兵部少輔出て一礼して、今度の御手柄末代までも其隠れ有るまじ、御運こそ是非なけれ（ご運なのだからしかたがない。結局、運がなかつたのだからしかたがない）と申されければ、三成聞きて尤に候、我若年より太閤の御厚恩を蒙る。其報恩に秀頼を再び天下

に備へ奉らんと存じ立つと云へども、運尽きて此体に成り

候となり。兵部が曰く、御氣分悪しく見え候、御薬を用ひられ候へとあれば、今此身には薬入らずと辞ことわるせらる。田中重て憚りなく申す様なれども、御命はなき者なり、然れども大将たる人の最後の御嗜たしなむこと・心がけ、用意、覚悟みなれば、薬をまわり身を健かに御持候へかしとあれば、尤なり、左にあらば薬を給んと申されければ、

田中悦て医師に試させ、薬を用ひけり。扱何に依らず御用の事此者に仰せ付けらるべしとて宮部善八と云ふ者を付置き、井ノ口に一日逗留し、夫より高宮に一宿し、翌日森山

に着く。三成懷より一尺三寸の短刀を取り出し、是は忝かたじけなくも秀吉公より御形見に拜領したる切刃兼眞かねざね（注5）なり迫といて政久に渡す。兵部頓とみ（さつそく）て公（家康）へ奉りけり。

【小西摶津守行長は美濃國柏河の谷と云ふ処に隠れて洞の中に忍居をりけるを、何者ぞと尋ねければ、病者の山人なりと答へけるを、怪みて林蔵主と云ふ出家捕へて、九月十八日公が江州の八幡山に到り玉ふ節引参る。御褒美として黄金十枚を賜ふ】

治部少輔三成を森山より田中兵部召連れ都へ上り、夫より小西、安國寺を加へ、囚人三人召に依て大坂へ行く。公

本多中務（本多正純）を以て事の次第を御尋ねの処、三成が云、替わる事候はず、斯る事古今の様に多し、家康を恨み申すに非ず、此上は中務殿数年のかかる好みに内府へ能き様に申し、早速成敗頼み入ると斗りなり。中務心得申すとて入りぬ。去んぬる日鉾楯の諸侯、其外諸歴々出座有りしが、三成に対し、常の利巧（利口）と違ひ不覚にして縲絏（罪人として捕らわれる）の恥に逢ふよりは天晴関ヶ原にて討死有るべき事なりと云々。三成此事を伝へ聞いてあざ笑て、討死杯を能き事とするは葉武者（端武者・取るに足りない武者）のする事なり。大将たる者は如何にもして命を全うして後日の功を思ふなり。われ命を捨てざりしこと全く臆したるに非ず、一度大坂へ入り、輝元と評合せ、今一戦と志す故なり、内府の御運強きが故に吾れ是のごとし、武将の法を知らぬ人々かなと云ひければ、皆皆理に伏して詞なく、福島正則申されけるは、三成の詞、至極（極めてもつともなこと・道理にかなつて）せり。武士に生れん者は、誰々も三成の如くして死にたき者なり。豈に恥辱とせんや（どうして恥辱と思おうか、思いはしない）と云はれる。

籠（こも）る。柴田が士ども三成程の人如何なる岩の狭間にて成りとも自害有るべし事なりと云ひければ、三成あざ笑ひ、汝等如きの平士は敗軍に及ばず其儘腹切りたるがよし、三成如きの大将は命さへ有れば本望達する事もあり、良将は死處を見ずと云ふ事を知やと云へるとぞ。】

【一説に、三成を大手門の脇に一間なる処にくも手結で押籠（こも）る。柴田が士ども三成程の人如何なる岩の狭間にて成りとも自害有るべし事なりと云ひければ、三成あざ笑ひ、汝等如きの平士は敗軍に及ばず其儘腹切りたるがよし、三成如きの大将は命さへ有れば本望達する事もあり、良将は死處を見ずと云ふ事を知やと云へるとぞ。】

公此三人をば京都へ遣し、奥平美作（京都所司代の奥平信昌、正室は徳川家康の長女亀姫）に預け置くと有て、又京都へぞ戻しきる。斯て三成、小西、安國寺度々奥平に訴けるは、疾く殺して給はれと有りければ、誅せよ仰出さる。此によりて十一月（旧暦十月）朔日囚人を車に乗せ、一條の辻より室町通りを下り、寺町へ出でて六條河原へ引出す、見物の貴賤群集す。七條道場にて上人十念を授けに出でらる。さて三人は敷革になほると、等く穢多が手に懸け成敗して、三條の橋下に首共をかくる。三成、原隱岐守、小野木縫殿、川尻肥前守も同日成敗なり。此首共同所にかけられけり。

注1 磯野平三郎は父行信の次男で近江の豪族の出身。祖父は、浅井長政の家臣で佐和山城主であつた磯野員昌。また関ヶ原の戦いで石田方の不利を悟り、八十島助左衛門が逃亡したと云われるが、それを見て詠んだ「関ヶ原八十島とかけて逃げ出でぬと 人には告げよ あまりの憎さに」という歌が残る。戦後は近江にて蟄居し、藤堂高虎に招かれ、家臣になる。（『関原軍記大成』）

注2 渡辺甚平（じんべい）は、関ヶ原の戦いで敗戦後、敗走した石田三成に付き従う。伊吹山中から柱法師まで従うが、三成の命令により涙ながらに分かれている。

(『平野庄郷記』)

注3 三成の信頼厚い近臣。

注4 田中吉政の出したお触れば、次の如し。

一 石田三成、宇喜多秀家、島津義弘を生け捕りにした者は、永久に税金と兵役を免除する

一 打ち果して捕らえた場合は、金子百枚を与える

一 三人の事を報告しなれば、一族と共に村人全員を処刑する

四 三成の心境

捕縛された三成を

見て、本多正純が軽侮して問うた経緯がある。

「戦に敗れて自害もしないで捕えられた心境はいかに」と。

三成は嘲笑い、「汝は

武将の道を知らぬ。腹切るのは端武者のすること。大将たる者はいかなるときも命を全うして後日の功を思ふなり。」と三

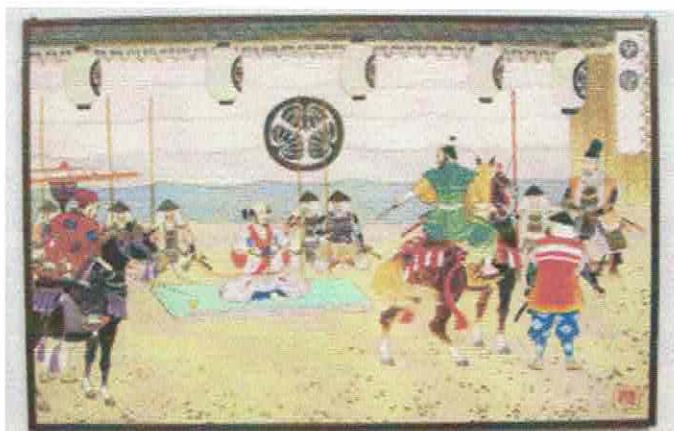
注5 石田三成は太閤から給わった脇差（寸延短刀）石田貞宗・東京国立博物館蔵所蔵）しを吉政に授けた。この脇差しは手厚くもてなされた礼であるという。また、三成の大小の打刀（さゝのつゆ、備後貝二原正真作）は捕縛者である田中伝左衛門（田中吉忠）に渡る。兼真は関室町時代から続く名門鍛冶です。

三 些細な記述について

関ヶ原の戦いを始め、江戸時代以前あつたに古戦場・人物・城郭。神社仏閣・各所の古城等の記述がある美濃明細記は、今回の石田三成の末路などは百四十年弱経つてからの文章である。したがつて、通説と一部違う事柄や名前や名称等が見受けられる。例えば、石田三成の石高を二十五万石としている。善院は一体どの寺か。田中政久は吉政のことか。三成を捉えた者で、田中傳右衛門は伝左衛門のことか。森山は守山か。柴田が士どもは一体誰なのか。六条川原で同日処刑された原隱岐守・小野木縫殿・川尻肥前守の三人は誰か等である。

注 写真は、岐阜関ヶ原古戦場記念館で、令和三年九月に特別展示「三成と関ヶ原」から撮影したものです。

注 表紙の三成隠れ岩窟の写真はインターネットから



大津 家康の本陣に引出される

参考 陣跡が伝える関ヶ原の戦い

前関ヶ原町歴史民俗資料館長の草野道雄氏

「上平寺・弥高へと進み、春照から伊吹山の麓、上野に出る。春照の本陣でしばし休んだとされ、そのことで徳川軍に焼き討ちされたという。

「伝承 再会を約束しての家臣との別れ」三成は、共に行動してきた近習の磯野平三郎、渡邊勘平、塩野清助の三人といつどこで別れたのかは、定かではない。三成の伝承はあつても、家臣に触れたものが無くわからない。関ヶ原合戦図志（神谷道一著 明治二十五年発行）には、「三成は皆散じ去らしめ独り板並の山中を過ぎ・・・」とある。

② 一日目 九月十五日 夜

上野から姉川上流に向かつた三成は、板並、吉槻を経

て、敗戦の一夜を曲谷集落の向谷の炭焼き小屋に留まる。
上野→（姉川）→板並→吉槻→曲谷

「伝承 石田ケ洞」曲谷の「白山神社由緒調書」に「三成戦場を遁れ、本社裏道より字ムカイラに至れり、辺りには炭焼き小屋がある」と、現在でも語り継がれている。

① 一日目 九月十五日
午後2時過ぎ、小早川秀秋の反応に大谷派壊滅の報をうけた三成は、再起を期し関ヶ原の戦場を離れ、近江に向かう。



云 石田三成遺愛の鉄扇

石田三成公事記

↑上野
 笹尾山三成陣→関ヶ原玉→米原市上平寺→弥高→春照
↓上野
 玉から近江へは北国街道があり藤川から木之本へと続く。しかし街道を避けると、その北側の山裾を這うように

避難者を受け入れてきた村である。六七二年の壬申の乱では、大友皇子方の七人の武人が逃れてきたと伝えられる。また、秀吉の母、大政所の出生地ともいわれ、白山神社の拝殿脇には、「大政所の石仏」を祀る石の祠があ

る。本能寺の変のときには、長浜にいた大政所と北政所が明智軍の襲撃を避けてここに避難し、更に美濃に避難したと言われている。

③ 二日目 九月十六日

曲谷から峠を二つ越えて、伊吹山麓の西側を目指す。夕方、谷口集落（長浜市谷口町）に着く。

曲谷→天吉寺越→草野→西村→黒坂峠→谷口

④ 三日目 九月十七日

十六日の夜は、谷口集落の一軒に匿われ十七日もここで過ごし、十八日古橋に向かう。

「伝承 石田家・石田神社 谷口集落」現在の谷口集落の八百mほど上に当時の集落があつた。旧集落の地には、今も「石田神社」がある。三成を泊めたことで「石田」姓を与えられた石田家の敷地内に祠がある。谷口の石田家には「寝床の床をめくつて匿い、お札に刀と短刀を拝領し、さらに石田姓と鳩八の家紋も与えられた」と伝えられる。

⑤ 四日目 九月十八日

谷口から古橋をめざして、谷口集落から再び山の中に入り尾根道をたどり、夜、古橋に辿り着く。

谷口→小谷山→山田山→己高山→木之本石道→古橋法華寺

「伝承 三成幼時読書等を学びし所法華寺・三珠院」三成は、幼いころは生地に近い石田町の大原觀音寺（米原市山東町朝日）に預けられていたが、十歳頃姉川の戦いなどを避けて古橋の法華寺で学んでいる。この時、鷹狩りに来た秀吉にお茶を出したのが三珠院であった。

一説には、三献茶の話や秀吉との出会いは、大原觀音寺で、三成は、オトチ岩窟に隠れたという伝承もある。

⑥ 五日目 九月十九日

法華寺は、三成を受け入れてくれませんでした。長居はできません。三珠院住職の善説とは旧知の与次郎の計らいで、三成は、オトチ岩窟に隠れた

「伝承 オトチ岩窟」法華寺から三キロの山奥にある。岩の間を降りると岩窟になつていて、岩の隙間から光が差している。広さは奥行き8m、横3m、高さ2mほどである。三成は、ここで傷心衰弱した身を横たえ、与次郎の介抱を受ける。

⑦ 六日目 九月二十日

岩窟は隠れ家にはなるが、腹をこわしている三成には、堪（こた）える。二十日、与次郎は三成を家に連れ帰り屋根裏で休ませる。しかし、東軍、田中吉政隊の探索が古橋にも及んできた。九月十七日に、田中兵部大輔吉政が北近江に出したお触れは、左記である。

一 石田三成、宇喜多秀家、島津義弘の三人を捕縛した者は、年貢を永久免除する
一 打ち果して捕らえた者は、金子百枚を与える
一 匿つた者は、その者は当然のこと、その一族、村人全員を処罰する。

「伝承 与次郎の家と石垣 古橋集落」古橋の竜泉寺の近くにある。厳しい探索に三成は、与次郎に害が及ぶことを心配して、申し出るよう伝える。一説には、与次郎は、三成をカマスに入れて背負い、家の西の2mほどの石垣を飛び降りて古橋の村を出ようとした。しかし、探索隊に見つ

けられたとも伝えられている。

⑧ 七日目 九月二十一日

合戦の日から七日目、三成は田中吉政の家臣田中伝左衛門（長吉）に捕縛され、九月二十一日から三日間、井ノ口の日吉神社境内に留め置かれた。

「伝承 荘粥 井口集落」吉政の陣があつた井ノ口（長浜市高月町井ノ口）では、村人が衰弱した三成を思いニラ粥をつくり癒したと伝えられている。また、吉政の配慮であり、三日間留め置き体力の回復を図つたとも思われる。

「伝承 石田貞宗」吉政と三成は、最後の言葉を交わす。

吉政は、関ヶ原での戦いに、数十万の兵を率いての采配を認め、結果については天の命とする。三成は、結果を無念としながらも、太閤への報恩として後悔なしと伝える。そして、改めて吉政にかつて呼び親しんだ「たひよう（田兵）」と声をかけ、「こまで所持していた太閤秀吉より給わった切刃貞宗を吉政に授ける。

「伝承 三成の辞世」オトチから出て山を下るときに垣間に見た琵琶湖に「世の隅々まで豊臣の火を灯さん」とする思いを我が身に重ねて詠む。「筑摩江（え）や 芦間に灯すかがり火と ともに消えゆく 我が身なりけり」

⑨ 九月二十四日～二十五日

三成は、二十四日井ノ口から、二十五日家康のいる大津陣屋に送られた。引見した家康は、本多正純に預ける。

⑩ 十月一日

家康が大坂城に入ると、三成、そして小西行長、安国寺恵瓊も大坂に移され、その後大坂・堺の町中を引き廻され、十月一日京都でも町中を引き廻され六城河原で斬首さ

れ、三条河原に晒される。

「伝承 干し柿は、胆に毒」「柿を食べるとお腹が冷え腹痛になる心配がある」と三成は答えたという。刑場で最後を迎えるとする時、三成は喉が渴いたと「湯」を要求、警護の者が代わりに差し出した「あまぼし」を「胆の毒」だと食べなかつた。今にも首を刎ねられるのにと冷笑する者に「大義を思うものは、首を刎ねられる瞬間まで命を大切にするものだ」と冷静かつ士気衰えずの姿勢を示した。写真は、岐阜関ヶ原古戦場記念館で、令和三年九月に特別展示「三成と関ヶ原」から撮影したものである。



六条河原の刑場にして斬首

参考

石田三成と愛刀 石田正宗（石田切込正宗）

現代で言う官僚のような立場だった石田三成も、豊臣秀吉対柴田勝家の「賤ヶ岳の戦い」に参陣して「一番槍」（槍を用いて交戦の口火を切る軍団）を務めた他、二十七歳で「九州征伐」、三十二歳で「小田原攻め」に従軍するなど、参謀として数々の戦に参戦した。その戦いの傍らにあつたのが、鎌倉時代末から南北朝時代に、相模国鎌倉で活躍した刀工「正宗」の日本刀であつたと伝えられている。

この正宗の刀は、無銘であるものの、沸（にえ）の美しさを表現した「相州伝」（そうしゅうでん）の作風で、「石田正宗」と言われている。また、刀身の棟に二ヵ所、茎の棟に一ヵ所の切込み（受け傷）があることから、別名「石田切込正宗」とも呼ばれている。

刃長 六十八・八cm

石田三成 → 結城秀康 → 津山藩松平家 → 東京国立博物館所蔵

石田三成の脇差（切刃貞宗）

石田三成は、石田正宗の他に、相州伝の代表的刀匠「貞宗」の脇差も所持していた。江戸時代の脇差とは異なる平造の「寸延（すんのび）短刀」（刀身の長さが一尺を超えるが短刀の様式を持つ物）で、「腰刀」（こしがたな）とも呼ばれています。

この脇差は豊臣秀吉から拝領した物で、石田三成が家宝として

命の次に大切にしていたと言われている。

石田三成は関ヶ原の戦いで徳川家康に敗れ、家康の命で石田三成を探していた田中吉政に捕えられるが、その際、腹痛で病

んでいた石田三成に対し、ニラ粥を勧めるなど手厚くもてなしてくれた田中吉政父子に、その礼として、秀吉から給わった短刀（脇差）を受けたと伝えられている。この時に贈ったのは名物「切刃貞宗」だという伝説が有名だが、『寛政重修諸家譜』によると実際は手搔包永（てがいかねなが）の短刀で、吉政本人ではなく、長男の田中吉次に手渡したらしい。

石田貞宗 所蔵・伝来 無銘 重要文化財 三十一・二cm

東京国立博物館所蔵

石田三成の打刀（さゝのつゆ）

関ヶ原の戦いで田中吉政配下の田中吉忠（田中伝左衛門）と沢田少左衛門に捕縛された時は、無銘の打刀と短刀を差していた。捕らえられる直前、三成は名譽ある死である切腹を田中伝左衛門に願つたが、伝左衛門はそれを無視して捕縛、三成は士の道⁹に背くと憤つて伝左衛門を呪つている（『石卵余史』）。打刀（備後貝三原正真作）の方は徳川家に没収された後、家康からの恩賞として吉政を介して捕縛の実行者である伝左衛門の手に渡り、後に「さゝのつゆ」の号を与えられた。刃長 六十五・八cm。

石田三成の短刀

東浅井郡浅井町の谷口に三成が一時足を止め、世話になつた庄屋の縁の下に匿つたという説がある。このとき、「大変お世話になつたから孫の代まで伝えよ」と言い、三成は家紋である「鳩八の紋」「石田の姓」「短刀」を残して立ち去つた。短刀はその後、自宅の天井に吊るしていたが神社に奉納し、戦後は米軍に供出してしまつた。三成を匿つた跡地には、石田神社が祀られている。

第一部 石田三成公の死に様

桐野作人さんの講座をインターネットから全引用

第一回 家来と分かれて一人きりの逃亡

慶長五年、天下分け目の関ヶ原の戦いで、西軍の実質的な司令官として指揮をとった石田三成。しかし小早川秀秋の裏切りなどもあり敗北。敗軍の将として斬首に処せられたが、豊臣家に忠義を尽くした末の悲劇だった――。

三成は武運に恵まれなかつたことを悔しがりながら、わずかな手勢を引き連れて後方の伊吹山中に逃れた。三成が自刃しなかつたのはあくまで大坂に入つて再起を期そうと考えていたからである。

三成は人目につくのを避けるため、途中で家来たちと別れ、わずかに渡辺勘平・磯野平三郎・塩野清介の3人だけを同道して、近江浅井郡の草野谷を経て大谷山に逃れた。その頃、三成の居城、佐和山城も総攻撃を受け、十八日に陥落した。父正継、兄正澄をはじめ一族郎党は城と運命を共にした。家康は近江出身で三成とも親しかつた田中吉政に、寄る辺を失つた三成の捕縛を命じた。

家来たちとも別れを告げ、ただ一人となつた三成はさらに山間を北に向かう。伊香郡に入り、古橋村の法華寺三珠院に身を寄せた。ここは三成の領地で住職の善説とは親しかつた。

第二回 逃げ切れず、ついに捕まつた三成

しかし、三成の潜伏は村人たちに知られてしまう。すでに田中吉政が三成の捕縛を命じる触れを出しておらず、もし置つたりすれば、その村全体を罰すると布告していた。

そこへ、百姓の与次郎太夫が三成を気遣い、山中の岩窟に潜伏すればよいと勧めた。与次郎太夫はかつて三成が面倒をみたことがあつたので、その恩義に報いようとしたのである。そして毎日、三成のために食事を運んできたが、三成は逃亡中に下痢を起こして体調を崩して寝込んでいた。だが、三成の潜伏は村の名主が知るところとなつた。与次郎太夫がそのことを告げると、三成もさすがにもう逃られぬと観念し、これまでの好意を謝し、吉政に告げさせた。敗北から六日後の二十一日、三成はついに捕縛されたのである。

なお、この岩窟は伝承では、伊香郡高時村（現・長浜市木之本）にあり、大蛇（おろち）の岩窟と呼ばれている。三成の捕縛については異説もある。家康の同盟衆、板坂ト斎の『慶長記』には、三成の行方を探索していた田中吉政の宿所を、ある夜、一人の男が通りかかった。番衆が尋ねたところ、水汲みに行くと答えた。何者も通してはならないという命令だつたので、番衆が捕えてみると、これが三成だつたという。

第三回 翠地でも堂々としていた三成

ともあれ、捕縛された三成は田中吉政によつて大津の家康の陣所に連行された。家康はその身柄を謀臣の本多正純に預けた。正純が三成を軽侮して問うた。「いくさに敗れて自害もしないで捕えられた心境はいかに」と。三成は怒つて「徳川殿を討ち滅ぼさずば、豊臣家のためにならぬと思つて挙兵したまで。汝は武将の道を知らぬ。腹切るのは端武者のすること。源頼朝公がいくさに敗れて洞窟に身を潜めて再起した故事を知らぬか」と反論すると、正純は黙

つたという。

家康と対面したのは二十五日である。対面前に、三成が門外で待っていると、福島正則が通りかかり、「汝は無益の乱を起こして、その有様は何事ぞ」と悪罵（あくば）を投げかけると、三成は「おのれを生け捕つて縛れなかつたのは天運なり」と答えたという。

家康は勝者の余裕か鷹揚（おうよう）にかまえて、「かかることは昔からよくある試しなり。決して恥にはあらず」と声をかけると、三成も「天運の然らしめるところ。早く首を刎はねられよ」と答えた。これには家康も「さすがに大将の器量よ。平宗盛とは異なる」と感じ入った。宗盛は源平の壇ノ浦の戦いで往生際が悪く無様に捕虜となつた人者である。

第四回 最期に見せた三成の誇り

家康は上洛すると、三成のほか、小西行長や安国寺惠瓊とともに京都所司代の奥平信昌に預けられた。その役宅は現在の二条城東北角あたりだといふ。

十月一日、三成など3人は車に乗せられ、堀川通りを北上、一条通りから室町通りに入つて南下し、六条河原まで引き回された。途中、三成が喉の渴きを訴えて湯を求めたが、役人が「湯は求めがない。干し柿なら持ち合わせがある」と答えると、三成は「それは痰（たん）の毒だから要らぬ」と告げた。役人が「ただ今首を刎ねられるというのに、毒断ちはおかしい」と笑つた。

三成は毅然として「汝らにはもつともの了簡だが、大義を思う者は首を刎ねられるときまで命を惜しむのは何とか本意を達せんと思うからだ」と諭した。

第三部 石田三成公の家臣団

1 青木市左衛門

青木市左衛門（いちざえもん）は、石田三成の家臣で預り地の代官を務めたとさる。関ヶ原の戦いでは、石田隊の鉄砲頭として出陣している。（『平野庄郷記』）

2 赤尾四郎兵衛

赤尾四郎兵衛（しろうびょうえ）は、関ヶ原役で河瀬左馬助隊について、岐阜城の救援に権原彦右衛門、松田重太夫らと共に派遣される。奮戦後、亡くなつたそうだ。

（『関原軍記大成』）

3 東新太夫

東新太夫（あずましんだゆう）は、関ヶ原で石田軍の先手として、勇敢に戦かつた。しかし、加藤嘉明の家臣・原甚兵衛に討たれる。（『関原軍記大成』）

4 安宅作右衛門

安宅作右衛門（あたかさくえもん）は、佐和山領の麦撻發布に携わっている。関ヶ原では、物頭を務めるが、黒田家家臣に討ち取られる。（『黒田家譜』）

5 湿美孫左衛門

湿美孫左衛門（あつみまござえもん）は、関ヶ原の戦いで使者として松尾山に赴き、動かない小早川秀秋に出陣を促す。（『関原軍記大成』）

6 阿閉孫九郎

阿閉孫九郎（あつじ／あべまごくろう）は、石田家家臣に多い近江湖北出身だと伝わる。関ヶ原に着陣した宇喜多秀家の元に使

いとして赴く。関ヶ原の戦いでも奮戦して討死す。

(『関原軍記大成』)

7 磯野平三郎

磯野平三郎は父を行信とし、その次男。近江の豪族の出身です。祖父は、浅井長政の家臣で佐和山城主であつた磯野員昌です。磯野員昌は、姉川の戦いで「員昌の姉川十二段崩し」という逸話が残る人物です。

磯野平三郎は、三成の家臣として関ヶ原の戦いに参戦する。関ヶ原敗戦後に、塩野清助、渡辺甚平とともに、三成の敗走に最後まで付き従つた忠臣として知らる。しかし、三成に説得されて涙ながらに分かれたという話がある。

また関ヶ原の戦いで石田方の不利を悟り、八十島助左衛門が逃亡したと云われるが、それを見て詠んだ「関ヶ原 八十島とかけて逃げ出でぬと 人には告げよ あまりの憎さに」という歌が残る。戦後は近江にて蟄居していたが、藤堂高虎に招かれ、家臣になった。

8 猪尾甚太夫

猪尾甚太夫は、杭瀬川の戦いで、敵将・成田平左衛門を討ち取り、首級をあげている。

(『石田軍記』)

9 乾次郎兵衛

乾次郎兵衛（いぬい じろべえ）は、石田三成の家臣です。関ヶ原合戦前に沢田小三郎と共に斥候（せつこう）を務めたと云われる。斥候とは、敵の状況や地形などを探ることです。途中で徳川家康方の斥候である森勘解由（もり かげゆ）、沢井左衛門と遭遇したが、互いに名乗り、双方陣へ引き返したとされる。

10 入江権左衛門

入江権左衛門も三成の家臣で、関ヶ原の戦いでは、三成の命で

島津隊に参加した。島津隊とは、島津義弘を大將にした三成方の西軍ですが、関ヶ原の戦いではあまり動かず、西軍の敗北が決まる敗走する。敗走といつても敵に背を向けるのではなく、敵の大軍の中を堂々と突破する「島津の退き口」は、島津の勇猛さを伝える話として有名です。その敵中突破に入江権左衛門は同行し、大津まで案内した。

(『関原軍記大成』)

11 上野喜左衛門

上野喜左衛門（きざえもん）は、佐和山城落城の際、生け捕りになる。

(『脇坂家伝記』)

12 宇多頼忠

宇多頼忠は、三成の妻の父です。

三成の義父にあたる人物ですが、始めは豊臣秀吉の家臣で尾藤姓を名乗っている。年は違うが当時は三成の同僚で、その縁で豊臣秀長の仲介で三成と娘が結婚した。

宇多頼忠は秀吉に仕えた後、秀吉の弟・秀長に仕え、藤堂高虎に次ぐ家老になっている。

12

その後、宇多頼忠の兄が秀吉の勘気に触れ滅ぼされてしまい、尾藤姓から妻の宇多姓にし、宇多頼忠と改名したと伝わる。その後、豊臣秀保、秀吉に仕え、秀吉没後は三成の下に身を寄せていた。その為、三成の家臣としても名前がある。関ヶ原の戦いでは、三成の一族衆と共に三成の居城・佐和山城を守る。しかし、多勢に無勢で佐和山城は落城し、宇多頼忠は嫡男の宇多頼重と共に自害し、親族の尾藤善四郎により介錯されたと云われる。

13 大島助兵衛

大島助兵衛（すけべえ）は、文禄三年十月から十二月まで、佐竹領の太閤検地の担当だった。

(『関原軍記大成』)

14 大音新介

大音新介（おおと しんすけ）は、島津領の太閤検地で、三成から総奉行を命じられる。

三成から大音新介に送られた文書が数多く残っている。

慶長三年（一五九八年）後月に三成から大音新介に送られた文書の現代語訳を紹介する。『三成から大音新介への文書』

「（秀吉様は）我らに筑後・筑前をくだされ、九州の物主にしてくださるとのご意向でした。

しかし私が九州へ行けば、佐和山に置くべき人材はありません。また、このあたりには秀吉様の御用を申し付けるのにふさわしい人も少ないので、我らはこのまま（佐和山にとどまる）ことになります。

近江のその方の知行や蔵入などが増えないことになれば、後悔もありますが仕方ありません。

また、筑後・筑前が秀吉様の御蔵入地になつたので、そのことを百姓によく申し伝えました。

また、金吾殿（小早川秀秋のこと）は、越前に移封ですので、我らにその御代官をするようになるとのことです。そこで、近々筑前へ行くことになりました。

その点、承知おきください。

また妻と石田正継殿（父）へもお伝え下さい。」

こういった趣旨の文章が残されている。

『文書から読み取れること』

この文章からは、当時、佐和山城十九万四千石の所領であつた三成に、秀吉から筑前・筑後の大大名の打診があつたようですが、それを断つたという内容です。

筑前・筑後とは現在の福岡県ですので、当時の都である京都か

ら遠く離れてしまうと秀吉の用を果たしづらく、代わりに佐和山城を任せられる人もいないという理由のようです。

筑前・筑後の石高は、推定五十～六十万石かそれ以上といわれている。

石高が高い方が多くの家臣を召し抱えられる。

そのため、関ヶ原の戦いが起きた時に、筑前・筑後の石高があればと打診を断つたことを悔やんだとする逸話も残されている。打診を断つたことで筑前・筑後は、秀吉の蔵入地になり、三成が代官を務めることになった。

このやり取りがあつた一五九八年五月はどのような年かといふと、朝鮮出兵の後半戦で慶長の役の最中である。途中休戦しているが、朝鮮出兵は、一五九七年一月から始まつた長い戦で、当然、恩賞として加増をして欲しい諸将が沢山いる。

しかし、朝鮮から土地を得たわけではないので、配分する土地¹³ではなく、三成は恩賞捻出のため全国を奔走し検地をしていた。一五九八年九月一八日に秀吉が亡くなつたことで、朝鮮出兵も終了するが諸将に加増はできなかつた。

そのような背景があつたので、個人的な所感であるが、大幅加増に戸惑いがあつたのかもしれない。

またこの時代は普通のことなのか、わかりませんがこの件は、大音新介から三成の妻と父に伝えて欲しいと書いてある。

三成は、佐和山城を留守にすることが多かつた。

家族に会う時間はあまりなかつたと思うが、家臣から家族に伝達という点が現代人の私には不思議な感じた。

（『大阪城天守閣所蔵文書』）

15 大橋掃部

大橋掃部（おおはしかもん）も三成の家臣です。

関ヶ原の戦いで奮戦するものの、黒田隊の後藤又兵衛と槍を合
わせ討死した。

(『関原軍記大成』)

16 大場土佐

大場土佐は、大庭という姓でも知られている三成の家臣です。元は豊臣秀次の家臣で、若江八人衆（わかえはちにんしゅう）の一人に数えられており、黄母衣十三人という精銳にも選ばれている。(※豊臣秀長(秀吉の弟)の家臣説もある。)

天正十一年(一五八三年)の賤ヶ岳の戦い、翌年の小牧・長久手の戦いの頃は秀次に仕えており、戦いに参加した記録がある。当時、実子のいなかつた秀吉の後継者候補でしたが、秀吉に秀頼という子供が生まれることで、秀次の立場は微妙になつた。理由は諸説あるが、秀次は自害に追い込まれ、主を失つた大場土佐は、石田三成に招かれ家臣になつた。

関ヶ原の戦いでは、石田隊右翼を守り亡くなつたとも、生き残つて蜂須賀至鎮の家臣になつたとも云われるが、定かではない。

(『関原軍記大成』)

17 大山伯耆

大山伯耆(ほうき)も同じく、石田三成の家臣になる前は豊臣秀次(秀長説も有)の家臣であつた。若江八人衆、黄母衣十三人の一人、豪傑として知られる。その豪傑を伝える逸話が残されている。秀吉が催した相撲大会で石田家代表として選出され、可児才蔵などと競つた話が伝わつてゐる。

しかし、相撲大会があつたとされる時期は、三成の家臣になる前の一五八六年(一五九七年頃)と見なされており、真偽は不明である。秀吉亡き後に起ころる関ヶ原の戦いでは、石田三成の陣代理を務たり、石田隊の先備えとして奮戦したと云われている。

関ヶ原の戦いで亡くなつたとも、生存したとも云われていて、真偽は不明である。(『関原軍記大成』)、(『武家時記』)

18 荻野鹿之介

荻野鹿之介(おぎのしかのすけ)は、関ヶ原の戦いで先鋒を務め、一番槍をつける活躍をみせ東軍を押し返したと伝わる。

(『石田軍記』)

19 小幡信世

小幡信世(おばたのぶよ)は、上野の小幡氏の出身で、天正六年(一五七八年)に生まれたとされる。通称は助六、十五歳で大坂に出て、石田三成に仕え、後に二千石の知行となる。

『常山紀談』という逸話集に小幡信世の話が残されている。小幡信世は関ヶ原の戦い後、近江石山寺付近に隠れていた。しかし、村人につかまり徳川家康が陣を置く大津へ送られる。信世は、家康より三成の行方を尋問され答える。

「主(三成)の行方は知つてゐるが、長年(三成に)恩を受けた身、この難儀を逃れる為に、主の居場所を伝えることは忠義に反するため言えない。例え、何があつても断じて言わない。試しに拷問にかけてみてはいかがか。」

と主君をかばつた忠義に家康は感心し
「この者(小幡信世)は忠義の武士である。
きつとこの者は、三成の行方を知らないだろう。
知らないから一人で落ち延びて、こうして捕縛された。
この忠義の武士を拷問してはならない。

大将たる者、義士、忠臣には情けの心を持つべきだ。
早く縄を解いてやれ。」と罪を問わず釈放した。

しかし、信世は敗戦した今、恥を重ねることはできないと、付近の寺で自害した。

(『常山記談』)

20 海北市郎右衛門

海北市郎右衛門（かいほう いちろうえもん）は、近江湖北出身であつたとされる。

関ヶ原の戦いの少し前に起きた杭瀬川の戦いでは、三成の家老・島左近の元で、中村一栄（かずしげ）の侍大将である野一色頼母（のいしきたのも）（野一色助義）を、鉄砲で討ち取るなど活躍した。

21 横原彦右衛門

横原彦右衛門（かしはら ひこえもん）は、三成の命にて、会津遠征に向かう大谷吉継を佐和山城に迎える使者となつてゐる。関ヶ原役では、河瀬左馬助、横原彦右衛門、松田重太夫らと共に、岐阜城の支援に赴く。瑞龍寺の砦にて、家康方の大軍を寡兵をもつて撃退し、ついに力尽き自害して果てたそうだ。

(『関原軍記大成』) (『石田軍記』)

22 上坂二郎右衛門

上坂二郎右衛門（じろうえもん）は、文禄五年 青木市左衛門の後任になり、三成の領地の代官に任命されている。

(『平野篤号機』)

23 蒲生郷舎

蒲生郷舎（さといえ）の始めの名前は、坂源兵衛といい坂氏の一族だという。

石田三成の家臣になる前は、関成政、柴田勝家、蒲生氏郷、蒲生秀行の家臣を歴任している。

蒲生氏郷の家臣であった頃、秀吉の九州征伐に参戦し、武功を挙げたことで「蒲生郷舎」の名前を授かつたそうだ。

会津九十二万石の大名であつた蒲生家ですが、名将と譽れ高い蒲生氏郷が亡くなる。

新しい当主・秀行の元お家騒動が起き、蒲生家は宇都宮十八万石に減封左遷されている。

このお家騒動の際に蒲生郷舎は浪人し、後に三成の家臣になつたと伝わりる。

関ヶ原の戦い後は蒲生家に帰参するが、三成の次女婿である岡重政と対立したことがきっかけとなり、蒲生家を去り藤堂高虎の家臣になつたそうだ。

その後、岡重政が失脚したため蒲生家に再度復帰し、今度は三成の縁者である町野幸和と対立する。

そして蒲生家から追放されるが、その十年後に再び町野幸和と対立し今度は、町野幸和が失脚する。

蒲生郷舎は蒲生家に復帰しますが、後に蒲生忠知によつて追放されたそうだ。

24 蒲生将鑑

蒲生将鑑（しょうげん）の元の名前は、安藤直重と言う。後に蒲生氏郷によつて蒲生姓を賜り、蒲生将鑑となる。

蒲生家お家騒動後に三成に招かれて家臣になつたと云う。

そして、関ヶ原の戦いで討死したとされる(『関原軍記大成』)

25 蒲生頼郷（備中）

蒲生頼郷（よりさと）（備中）、関ヶ原の戦いで島左近と共に石田隊の先陣として、奮戦してことで知られている。

関ヶ原の戦いのインパクトから三成の家臣のイメージが強いかもしれないが、元は六角氏の家臣、その次に蒲生家の家臣になつた人物だ。

蒲生頼郷の通称は、横山喜内といい、後に名将・蒲生氏郷から

働きを評価されて名を与えられ、蒲生頼郷と名乗るようになる。また蒲生頼郷は、蒲生備中や蒲生真令（さねのり）という名前も伝わっている。

この時代の人は一人の人なのにいくつも名前があるが、石田家には蒲生姓の家臣が多く混同したのか、蒲生郷舎も同一人物であると見なされた時期がある。

蒲生頼郷は、蒲生氏郷の家臣であった時期があるが、氏郷からの信頼の厚い人物であつた。

知行一万三千石と大名並みで、秀吉が蒲生家に期待したのは、蒲生家を会津に置き伊達政宗など東北大名の抑えとなることだが、蒲生頼郷その要となる場所を任せている。

しかし、蒲生氏郷が亡くなるとお家騒動が起き、秀吉の期待に蒲生家が応えるのは難しいと判断され、宇都宮に減封される。

石高が減ったことで、蒲生家から多くの浪人がでたため、石田三成が蒲生家旧臣を多く召し抱えたという。この時に、蒲生頼郷も三成の家臣になつていて、

知行は一万石とも一万五千石とも云われており、これは島左近につぐ待遇です。

その三成の期待に応え、関ヶ原の戦いでは奮戦したと云う。

島左近と共に石田隊を指揮し、左近が銃弾で負傷した後も蒲生

頼郷一人で前衛を支えた。そして、三成方の西軍が崩れる中、最後まで戦っていた石田三成も敗走する。

三成の退却を見届けた蒲生頼郷は、最後の突撃を始める。

徳川方と激突する中、かつての同僚であつた織田有楽に気が付く。

蒲生頼郷は良い敵に会つたと思ったそうだ、織田有楽は降伏して命乞いをするように勧めたと云う。

頼郷はカラカラ笑い降伏勧告を退けると、織田有楽に斬りかかり負傷させた。しかし、織田有楽の家臣に攻撃され壮絶な最期を遂げた。

またこの時、息子の蒲生大膳も討死している。

26 河崎新六

河崎新六は、島津領の太閤検地に携わり、大隅国を担当している。

（『島津家文書』）

27 河瀬織部

河瀬織部は、関ヶ原の戦い後、三成の居城・佐和山城の水の口で勇戦したが、敵が本丸に雪崩込み、命を落とした。

（『関原軍記大成』）

28 河瀬左馬助

河瀬左馬之は、関ヶ原の戦い前夜、使者を務め、織田秀信と丸毛兼利を味方にさせることに成功している。

松田重太夫、樺原彦右衛門、赤尾四郎兵衛らと共に岐阜城支援に向う。

衆寡敵せず、西軍の多くが討ち死にする中、河瀬左馬之は内城へ走ったそうだ。

29 北川平左衛門

北川平左衛門（へいざえもん）も元は、蒲生家の家臣だったその後まで戦っていた石田三成も敗走する。

時期は不明ですが、その後三成の家臣になり、関ヶ原の戦い後蒲生家に帰参し家老になる。

（『関原軍記大成』）

三成は関ヶ原の戦いで、近江国友（三成の領内にある）の鉄砲

を使用したと伝わる。

国友藤二郎(くにともとうじろう)は、近江にあった国友の鉄砲生産について指示を受けたとされる(『国友助太夫文書』)

3 1 雜賀内膳

雜賀内膳(さいがないぜん)は、『石田軍記』『惟新公開原御合戦記』に、島左近、舞兵庫と共に、一手の大将であったと記述されているそうだ。

一説では、雜賀衆の鈴木重朝(しげとも)と言われているそうだ

が、真偽は不明です。

関ヶ原の戦いの少し前に起きた伏見城攻めでは、城将・鳥居元忠を滅ぼすなど活躍するが、関ヶ原の戦い後は浪人になる。後に徳川家康に仕え、水戸藩家老となつたそうだ。

(『石田軍記』)、(『惟新公開原御合戦記』)

3 2 塩野清助

塩野清助は、関ヶ原の戦いで敗走する際、三成に最後まで付き従つたとされる。三成の命令で、泣く泣く離散したそうだ。

(『関原軍記大成』)

3 3 島左近

島左近という名前で知られているが、本人は嶋清興という名前を使つていたと云われている。

島左近は、「三成に過ぎたるもののが二つあり島の左近と佐和山の城」と謳われる程、三成の家臣として有名です。初めは畠山氏に仕え、畠山氏が没落し、筒井家、豊臣家と士官先を替え、石田三成の家臣になつたと云われている。

三成の家臣になつた時期は不明ですが、少なくとも天正十八年(一五九〇年)の小田原征伐後には家臣であつたと見られる。

三成の禄高が四万石の頃に、半分の二万石で左近を家臣にしたという逸話は有名です。

三成が佐和山城主になつてから仕えたとする説もあり、真偽は不明ですが、石田三成に左近が使えたのは、当時の人を驚かせたようだ。

関ヶ原の戦いの前哨戦といわれている杭瀬川の戦いでは、中村一栄(かずしげ)隊、有馬豊氏隊などを相手に勝利し西軍の士氣を高めたと云いう。

この時に、中村家の家老・野一色助義(のいっしきすけよし)(頼母)が戦死し、鎧塚が大垣市に残されている。

そして関ヶ原の戦いでは、陣頭に立ち石田隊を咤激励したと云う。

あまりの左近の恐ろしさに「誠に身の毛も立ちて汗も出るなり」と『常山紀談』に書かれているそうだ。

そして左近は被弾し亡くなつたとする説があるが、生存説も残っている。また、嫡男の島信勝も討死したと伝わる。

(『常山記談』)、(『黒田家譜』)

3 4 島勘左衛門

島勘左衛門は、島左近の従弟で、石田三成の家臣です。伏見城の戦いで戦死している。

3 5 神保源右衛門

神保源右衛門(げんえもん)は、石田三成が豊臣秀吉から筑前、筑後の代官をの代官を命じられた時、代官を務めたと見られている。

(『朱雀文書』)

3 6 杉江勘兵衛

杉江勘兵衛(かんべえ)は、あまり知られていませんが石田三成の重臣の一人と伝わる。

始めは稻葉良通（稻葉一鉄）に仕え、姉川の合戦などで戦功を上げたと云われている。

後に石田三成に仕え重臣になり、島左近や舞兵庫（前野忠康）と並ぶ勇猛さで称えられる。

田中吉政の家臣である辻重勝（勘兵衛）、藤堂高虎の家臣・渡辺了（勘兵衛）と並んで「三勘兵衛」と言われるそうだ。

関ヶ原の戦いの少し前に起きた合渡川の戦いでは、舞兵庫、森九兵衛（くへい）と共に、兵を率いて合渡川で家康方である黒田隊や田中隊と対峙する。

奮戦の後、多勢に無勢で苦戦し、杉江勘兵衛が殿になり退却を始める。そして杉江勘兵衛は、田中吉政の家臣と競り合い、ついに討ち死にしたと云われる。

田中吉政の家臣・辻重勝に討たれたとも、西村某に討たれたとも伝わる。（『関原軍記大成』）

37 隅東権六
隅東権六は、徳川家康が上杉討伐に出陣する際の使者になる。三成の嫡男・重家が大谷吉繼軍に属して参じることを言上したそうだ。

（『慶長見聞録』）

38 千田采女

千田采女（うねめ）は、三成の信頼厚い近臣です。関ヶ原で敗戦後、一時、磯野平三郎等は千田采女のところに潜伏しようとした。

（『関原軍記大成』）

39 曾根高光

曾根高光は、元小早川秀秋の家臣です。小早川秀秋が筑前、筑後を失い、大幅な減封になつた際、石田三成に出仕している。

（『曾根家譜』）

40 高橋権太夫

高橋権太夫は、関ヶ原に鉄炮頭として従軍し、田中吉政の甥・田中総兵衛に討たれている。（『関原軍記大成』）

41 高野越中

高野越中（たかの えつちゅう）も元は豊臣秀次の家臣で若江八人衆の一人です。

別名で平岡刑部という名前も伝わっている。

最初は秀次の養父・三好康長の家臣でしたが、三好信吉（後の秀次）が養子になると仕えたと云う。

その後、豊臣秀吉が養父となり豊臣秀次として、秀吉の後継者としての地位を固めている。

秀白の座も譲り受け順調に思えたが、豊臣秀頼誕生により事態は変わる。

秀次が自害する秀次事件が起き、高野越中は三成の家臣になります。関ヶ原の戦いでは、大山伯耆（ほうき）とともに、伏見城を攻めたり、関ヶ原の戦い本戦では石田隊本陣を守つたと伝わる。生き残り、戦後は浅野幸長の家臣になつたそうだ。（『武家時記』）（『前田家所蔵文書』）

42 佃宗右衛門

佃宗右衛門（つくだそうえもん）は、関ヶ原に弓頭として出陣している。田中吉政の家臣・中村采女に討たれた。

（『関原軍記大成』）

43 津田清幽

津田清幽（せいゆう）は、徳川家康に仕えた後に、三成の兄・石田正澄の家臣になる。佐和山城籠城戦を子と共に戦い、三成の三男・佐吉を出家させ助命を認めさせている。戦後は、徳川義直仕えている。

(『常山記談』)

44 土田桃雲

土田桃雲は、佐和山城の籠城し、守っていた。

佐和山城落城の際に、三成の妻を指し、自身も自刃したそうだ。
(『佐和山落城記』)

45 中島宗左衛門

中島宗左衛門(そうざえもん)は、関ヶ原の戦い当日、柵の前に軍勢を並べ、先手となつて奮戦している。敵味方が入り乱れて乱戦になり、討ち死にしている。

46 服部新左衛門

服部新左衛門(しんざえもん)は、家康の旗本・服部仲の従弟とされる人物です。石田三成の家臣として参戦した関ヶ原の戦いで討たれ、「一番首」とされている。

47 林半介

林半介は、三成が農民から使番に抜擢し、百石の侍にまで出世した家臣だそうだ。

「常山記談」に記載された逸話によりますと、林半介の堂々たる振る舞いを見た家康があの「白じの差物」を差した林半介とは、あっぱれな武者よ、武功を志すものは、林半介の草すりでもいたぐがよいと褒めたたえたエピソードがあるそうだ。(『常山記談』)

48 平塚久賀

平塚久賀(ひさよし/きゅうが)は、猛将と名高い平塚為広の弟

に当る。

平塚為広とは、三成の盟友・大谷吉継と共に関ヶ原の戦いに参戦した人物です。

平塚為広は、小早川秀秋などの裏切りで壊滅状態の中、なおも孤軍奮闘した後に討たれる。

平塚為広が亡くなる直前に、大谷吉継に送ったと云われている辞世の句は、「名のために捨つる命は惜しからじ ついにとまらぬ浮世と思へば」だという。

その平塚為広の弟が平塚久賀で、石田三成の家臣だと伝わる。

久賀は、大剛の者と名高く、徳川家康からの士官の誘いを受けたが、それを断り三成に仕えたという。

大剛の者とは非常に強い人という意味です。

関ヶ原の戦いで石田隊が壊滅し、徳川家康に生け捕りになった際に、惨めな姿を徳川方に嘲笑われるが、堂々と言い返したと¹⁹う逸話が残る。

平塚久賀は生き延びたようだが、詳細は不明です。

49 藤林三左衛門

藤林三左衛門(さんざえもん)は、一五九四年の太閤検地で、三成より佐竹領の常陸国と下野国の検地を任されたとされる。側量の基準や耕作管理者を定めるなど、優れた手腕を發揮したそうだ。

50 舞兵庫(前野忠康)

舞兵庫は石田三成の家臣として知られていますので、三成がお好きな方ならご存知の方も多いのではないか。

舞兵庫として知られるが、本名は前野忠康という。

そして、義父は前野長康といい豊臣秀吉の最古参の家臣です。舞兵庫は若江八人衆であり、黄母衣十三人の一人という豊臣秀

次の重臣の一人になる。

(※豊臣秀長の家臣説もあります。)

当時子供のいない秀吉の跡継ぎ候補として、甥の秀次が関白の座についていた。

しかし、秀吉の子供の秀頼が生まれると、次第に秀次は追い詰められ自害することになる。

この秀次の件に連座し、秀吉の命令で多くの秀次の妻や子供達が滅ぼされることになる。

舞兵庫にとつても大きな事件であり、主君の一族が滅んだだけでなく義父・前野長康も失うことになる。

前野長康は、秀次の家老を務めていたので連座し自害に追い込まれた。

舞兵庫にも害が及ぶことを危惧した三成は、舞兵庫を匿つたといふ。

そして、後に秀吉の許しを得て、石田三成の家臣になる。

石田三成の家臣の中でも破格の待遇であったようで、高禄で召し抱えてくれた三成に感謝したという舞兵庫の話が残っている。その後は、あの関ヶ原の戦いが起きる。

関ヶ原の戦いの少し前に起きた美濃福東城の救援や、合渡川の戦いに参戦している。

舞兵庫は、前哨戦から無事に帰還するが、関ヶ原の戦いで奮戦し、戦死したとの説が有力です。

舞兵庫の子供・左馬助は、丸亀藩の生駒家の家臣になり、後に家老になつたと云います。藤堂高虎の斡旋があつたという。

51 牧野成里

牧野成里も豊臣秀次の元家臣で、若江八人衆の一人になつていた人物です。牧野成里は、主君が亡くなつたり、没落したり苦

労したようだ。

始めは、滝川一益や織田信雄の家臣になるが、没落した為、長谷川秀一に仕えるが、朝鮮出兵中に亡くなる。

亡くなつた主君の代理を牧野成里が務め、それが認められて秀

次の家臣に抜擢され、若江八人衆の一人になつたそうだ。

関ヶ原の戦いでは、石田本陣後方を守るが、三成方は敗北したため池田輝政に助けを求めたそうだ。

そして助命され、後に徳川家三千石の旗本となつたと云われている。(『東照宮御実記』)

52 松田重太夫

松田重太夫(じゅうだゆう)は、関ヶ原の折、河瀬左馬之、樺原彦右衛門、赤尾四郎兵衛らと共に、岐阜城支援に派遣される。松田は稻葉山砦を守つたが、大軍を前に討ち死する。

(『関原軍記大成』)

53 水野庄次郎

水野庄次郎は杭ノ瀬の戦いで、一隊を指揮して、見方を励まし奮い立たせる。戦後、浅香左馬助と名乗る。

(『常山記談』)

54 村山理介

村山理介は、島津氏の太閤検地で、薩摩国を担当しています。関ヶ原の戦いでは、黒田軍に討たれた。

(『島津家文書』)、(『黒田家譜』)

55 森九兵衛

森九兵衛も豊臣秀次の元家臣で、若江八人衆の一人と称されています。

出自は、清和源氏の流れをくむ森氏と伝わる。

秀次亡き後、三成の家臣になる。

関ヶ原の戦いの少し前に起きた合渡川の戦いに参戦し、黒田長政らと対戦している。

しかし敗れて、舞兵庫、杉江勘兵衛らと共に合渡川から離れ、大垣城に退却したという。

その後、関ヶ原の戦いにて奮戦の末に討死したと伝わる一方、生存説もある。（『関原軍記大成』）

56 八十島助左衛門

八十島助左衛門（やそじますけざえもん）は、諸大名の外交を担当していた。

朝鮮出兵の際に、秀吉と島津家の取次もしていたようだ。

関ヶ原の戦いの際、なかなか動かなかつた島津軍の陣へ赴き、すぐに出撃して欲しい旨を伝える使者の役目を任される。しかし、島津隊に対し、馬上から出撃要請をしたため、島津豊久を怒らせてしまい無礼を罵（ののし）られる。

島津の怒りに恐れをなして、石田隊に逃げ帰つたとも、そのまま逃亡したとも伝わる。

先に紹介した磯野平三郎が憎さのあまりにと詠んだ歌は、この八十島助左衛門のことと伝わる。

関ヶ原の戦いの後は、藤堂高虎に仕えたそうだ。

磯野平三郎も戦後、藤堂高虎に仕えたとされるので、また同僚になつたということですが、上手くいったのでしょうか…。

（『関原軍記大成』）

57 山田嘉十郎

山田嘉十郎（じゅうろう）は、石田家の國家老で、三成の領地を良く治め、行政に手腕を發揮する。

関ヶ原の戦いでは、佐和山城の留守番を担当し、太鼓曲輪を守

つていた。

しかし、関ヶ原の敗報を聞くと、家康方が佐和山城に到着する前に、船で逃亡し、その後については不明だそうです。国家老なのに無名なのは逃げてしまつたからでしょうか…。

戦国時代は武勇伝が多いですが、実際はこのようなケースもあつたそうだ。

（『関原軍記大成』）

58 山田上野介

山田上野介（こうずけのすけ）は、三成の家臣ですが、三成の長女の義父でもある。

山田上野介の嫡男・山田隼人（はやと）（隼人正）と三成の長女は結婚している。

関ヶ原の戦い後は、山田上野介の妹・茶阿局が徳川家康の側室で、徳川家康の六男である松平忠輝の生母でもあつたため、山田隼人正は松平忠輝の家臣として生き延びている。

嫡男と三成の長女は婚姻関係にある。

肝心の山田上野介ですが、太鼓丸を守つていた、番頭（ばんがしら）という位にいた人物のようだ。

年貢の取り立てを任せられた三成の書状も残されている。

関ヶ原の戦いでは、三成の一族衆と共に佐和山城を守備する。

奮戦し佐和山城落城前に山田隼人正に脱出させ、菩提を弔うよう命じたと云う。

そして山田上野介は自害して果てる。

佐和山城落城の時のことや山田家について記されているそうだ。山田上野介の子孫宅には『佐和山落城記』という文書が残されている。

59 山田隼人（山田隼人正）

（『関原軍記大成』）

山田隼人（山田隼人正）は、山田上野介の子で、三成の長女の夫である。+ 佐和山城落城の際、妻や息子と共に脱出している。

一方、大坂の陣で木村重成に属して討ち死にしたとの記録もある。

60 横山監物
（『佐和山落城記』）

横山監物（けんもつ）は、杭瀬川の戦いで、有馬豊氏の郎党を組み伏せましたが、別の敵に討たれている。（『石田軍記』）

61 四岡帶刀
四岡帶刀（よつおかたてわき）は、一五九七年に三成が伊香郡落河村の百姓に出した田麦徵収の法令に名前が見える。

関ヶ原の戦いでは、佐和山城の留守番衆をしていた。

（『長浜城歴史博物館所蔵文書』）、（『滝川文書』）

62 渡辺勘兵衛

渡辺勘兵衛は、別名で新之丞（しんのじょう）とも表記す。

『佐和山落城記』によると、敗戦後に三成に従った家臣の一人として名前があり、途中まで三成と落ち延びたそうだ。

佐和山落城記とは、山田上野介（嫡男が三成長女の婿）の孫が書いた記録です。

渡辺勘兵衛について有名な逸話があるので、紹介する。

渡辺勘兵衛は、評判の高い武将であり、柴田勝家や秀吉などから士官の誘いを受ける豪傑です。

しかし、名だたる大名からの誘いを全て断っていたそうだ。

当時、秀吉の近習で僅か五百石であつた三成に、渡辺勘兵衛が仕え周囲を驚かせる。

疑問に思った秀吉が三成に理由を聞いたところ

「自分の五百石の知行全てを与えた。
勘兵衛に自分が百万石取りになつた際に、十万石を与える約束をした」

と三成が話したといい、秀吉が三成自身はどうするのかと聞くと、「勘兵衛の家に居候になる」と話したそうです。

その後、三成が佐和山城主になると、勘兵衛の禄も増やそうとしたのですが勘兵衛は殿が百万石の大名になるまで、知行は五百石のままになります」

と固辞し五百石のまま居続けたという逸話です。

どこかで聞いたような話だなと思いますが、島左近が三成に仕える時の逸話に似た話ですね。

この逸話は、昭和十三年発行の書物である『国史美談 教訓画苑』に記載があるそうです。元になる史実があるのかもしれませんが、ここが初めての出典（元であれば創作の話のように思います。2）（『佐和山落城記』）、（『国史美談 教訓が集』）

63 渡辺新之助

渡辺新之助は、合渡川の戦いで従軍し、黒田長政に槍をつけたそうですが、討たれる。（『石田軍記』）

64 渡辺甚平
渡辺甚平（じんべい）は、関ヶ原の戦いで敗戦後、敗走した石田三成に付き従う。

伊吹山中から柱法師まで従うが、三成の命令により涙ながらに分かれている。（『平野庄郷記』）

参考文献

石田三成の家臣・一覧－歴史上の偉人、有名人と子孫の大百科（kiirōipanda.com）

<https://kiirōipanda.com/mitunarikashin-ichiran/>